

タイ人学習者がインタビューテストで笑うとき

萩原 孝恵 池谷 清美

When a Thai Learner Laughs in an Interview Test

HAGIWARA Takae IKETANI Kiyomi

Abstract

Various studies have analyzed laughter as a by-product of jokes or a spontaneous reaction to finding something funny. However, the data on OPI tests of Thai students shows that this is not the case. This article presents and analyzes OPI data from 100 Thai university students majoring in Japanese. The distribution of students across OPI levels was 6 Novice-High(NH), 12 Intermediate-Low(IL), 19 Intermediate-Mid(IM), 32 Intermediate-High(IH), 15 Advanced-Low(AL), 12 Advanced-Mid(AM), and 4 Advanced-High(AH) students. KH Coder (Ver.2.00f) is used for analysis to investigate when and where it occurs. Data analysis and findings have revealed that 1) Laughter frequently occurs in Thai learners' utterances. 2) Laughter, elicited by Thai learners of Japanese, occurs in their own verbal utterances, not in reacting to a tester's utterances. 3) Laughter of Thai learners may primarily serve to signal that the turn is finishing or serves as a marker for showing that they want to end their turns. 4) Occurrences of laughter in utterances can be regarded as a cognitive manifestation. We also have explored laughter of Thai learners in relation to fillers in OPI data, and have noted that their laughter has functions toward self and others.

キーワード：タイ人日本語学習者、笑い、インタビューテスト、OPI データ、出現位置、生起環境
keywords: Thai learners of Japanese, laughter, interview test, OPI data, occurrence, conditions

1. はじめに

本研究は、タイ人日本語学習者の発話に現れる「笑い」に着目し、その生起環境から、「笑い」の運用上の特徴を明らかにしようとするものである。萩原・池谷（2015, 2016a）は、タイ人日本語学習者の OPI (Oral Proficiency Interview)¹⁾ データを調査し、タイ人日本語学習者の「舌打ち」の生起環境を明らかにしている。また萩原・池谷（2017）では、タイ人日本語学習者の発話に伴う舌打ちと笑いをタイ人特有のパラ言語行動と捉

え、その前後に共起するフィラーを通して分析を行い、笑いと言打ちがいかなる認知行動の現れであるかを検討している。本研究では舌打ちを対象とした萩原・池谷（2015, 2016a）と同様の手順により、タイ人日本語学習者 100 名の OPI における「笑い」の出現位置と生起環境を調査し、「笑い」がどのような状況で、どのような表現と共に現れるのかを分析する。

本研究が取り上げるタイ人日本語学習者の発話には、頻繁に笑いが繰り返し現れる。

萩原孝恵：山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科
Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University
池谷清美：チュラーロンコーン大学 文学部 東洋言語学科
Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University

(1) テスター：タイとシンガポールは似ていますか。

学習者：あーあ、{息を吸う音} シンガポールは、んー、{チッ} シンガポールはー、とー、{チッ}、とーきれいな町です、はいー {笑いながら}、でもタイはー、えとーごみがたくさんーあります {笑い} (中級 - 下、130IL)

本研究では、(1) のような笑いをタイ語文化における慣習的なものと仮定し、日本語文化にはないある種のパラ言語行動の表出とみている。パラ言語情報・非言語情報という分類については、藤崎(2005)が「意図・態度はパラ言語」「個性・感情は非言語情報」としている。そして森(2012)は、この藤崎(2005)の分類を出発点とし、(2) のような新たな分類を提案している。森(2012)によれば、本研究対象の「笑い」は次のような分類になる。

(2) 笑ってみせている場合はパラ言語情報。

おかしさにたまらず笑ってしまっている場合は心理状態。(森 2012:391)

筆者らは、当該 OPI データの文字化作業の段階で、面接形式のインタビューテストである OPI で、タイ人学習者たちが、特におかしくもないところで、よく笑っていることに違和感を覚えていた。しかし、なぜ違和感があるのか、なぜ印象が悪く感じるのかについて、会話のやりとり、隣接ペア、内容の検討をしてみても、これまで有効な説明をすることができなかった。本研究では、頻繁に繰り返し出現するタイ人学習者の笑いについて、不可解で不適切であるという解釈は、日本語文化に基づく見方であって、タイ語文化においては不適切な笑いではない可能性を探っていく。

2. 先行研究

笑いに関する研究は数多くあるが、水川(1993)は、従来の笑いに関する研究の多くが「冗談や

ユーモアの副産物」(p.79)として扱われてきたと述べ、「笑いを『社会的もの』すなわち『社会学の対象としての現象』として扱っていく必要がある」と主張している。笑いの機能に触れているものとしては、水川(1993)、橋元(1994)、村田・堀(2007)、笹川(2008)がある。このうち村田・堀(2007)、笹川(2008)は、異文化コミュニケーションにおける笑いを対象としている。

水川(1993)の笑いの分析は、相互行為の観点からトピック転換場面において笑いの出現する位置により、適切な笑い和不適切な笑いがあると説明している。すなわち、笑いの発生には「何かが起こったから笑いが起こった」(p.83)という推論が働くため、前の発話や活動が笑いの原因であると説明できる場合には「適切な笑い」(p.84)となるが、(3) のような笑いの発生においては、どこに笑うべき理由や原因があるのかが不明なため、「不適切な活動」(p.84)として、その理由や原因が探されると説明している。また、笑いはトピック転換の「分岐点となるポイントを生み出す」(p.86)とも述べ、笑いが「トピック終了のパターンの一つ」(p.86)として機能すると述べている。

(3) 第一の話し手：「ハハハハ」

第二の話し手：「何で笑ったの？」(または「どうかしたの？」など)

(水川 1993:84)

橋元(1994:43)は、笑いを自己完結する「対自機能」と、他者に働きかける「対他機能」に大きく分け、対他機能の下位にターンと関わる「会話進行調整的機能」を置いている。

一方、異文化コミュニケーションの場面での笑いを扱ったものとして笹川(2008)、村田・堀(2007)があるが、村田・堀(2007)は、英語を使用した会話で観察された笑いを7種類(①面白さに対する笑い、②和らげの笑い、③フィラー的笑い、④賛同の笑い、⑤あいづち的笑い、⑥特に面白さはない陳述や質問に添えられる笑い、⑦その他)に分類し、その機能を説明し、英語母語話者と英語非母語話者の笑いの違いを考察している。村田・

堀 (2007) によれば、英語母語話者の場合には面白い発話の後に笑うことが多いのに対し、英語非母語話者の場合には特に面白いとは思えないような発話に笑いを添えたり、笑いがあいづちのように添えられたりするということである。ここで本研究が着目したのは、村田・堀 (2007) が提示している「フィラー的笑い」というカテゴリーである。萩原・池谷 (2015, 2016a) では、タイ人の舌打ちにはフィラー的機能があると説明したが、笑いにもフィラー的機能があると考えている。しかし、村田・堀 (2007) では笑いのフィラー的機能はターンを維持するためと定義されており、笑いがフィラーとしての機能を持つ説明がない。本研究では、笑いの前後に生起する語から、笑いがフィラーのように機能する理由を説明する。また、水川 (1993) および村田・堀 (2007) が、聞き手が笑っている理由や原因を理解できない場合に笑いがマイナスに作用するという言及に対し、本研究では具体例を示し説明する。

3. 調査概要

調査データについて紹介する。データは、2012年から2014年にかけて収集したタイ人日本語学習者100名のOPIである。OPIレベル²⁾の分布は、上級-上4名、上級-中11名、上級-下15名、中級-上32名、中級-中20名、中級-下12名、初級-上6名である。当該データにおいて、笑いは100名中100名に観察されている。発話に伴う笑いの総数は5,255で、かなり緊張している場合にも笑いは出現していた。笑いは、(1)に示したように、発話中の「、」や「。」に笑いが添えられる形で出現していた。萩原・池谷 (2015, 2016a, 2016b) は、KH Coder を用いて舌打ちと笑いの前後20語を抽出し、舌打ちも笑いも類似したフィラーの共起がみられることを明らかにし、また萩原・池谷 (2017) は、舌打ちおよび笑いの直前・直後に出現するフィラーのみに焦点を当て調査している。本稿で扱う調査・分析では、KH Coder (Ver.2.00f)³⁾ を用いて、笑いの出現状況と生起環境を検討した。

4. 結果と考察

インタビューテストでタイ人学習者が笑うとき、タイ人学習者に一体何が起きているのであろうか。この問題を明らかにするために、本稿ではタイ人学習者の笑いを4つの観点から分析する。まず4.1で、タイ人学習者はインタビュー中にどのくらいの頻度で笑うのかについて、出現数の観点から検討する。次に4.2で、タイ人学習者が笑うのはインタビューテストで話しているときなのか、それとも聞いているときなのかについて、出現域の観点から検討する。そして4.3で、タイ人学習者は発話のどこで笑うのかについて、出現位置の観点から検討する。最後に4.4で、インタビューテストでの笑いはタイ人学習者のどのような認知行動の現れであるのかについて、生起環境の観点から検討する。

4.1 タイ人学習者はインタビューテスト中にどのくらい笑うのか

まずはタイ人学習者の笑いを出現数の観点から検討する。100名中100名に笑いが観察された本対象データの中で、最も笑いが多かったデータは141回、最も少なかったデータは7回であった。100名の笑いの総数は5,225であったことから、タイ人学習者は上限30分というインタビューテスト中に、1人当たり平均52回程度笑っている結果となった。

表1は笑いの出現数とレベルである。笑いの出現数をレベル別に比較してみると、初級から中級-中にかけて笑いは増加し、中級-中をピークに減少して、再び上級-上で増加している。この結果から、レベルと笑いの出現数には相関がみられないことが示された。すなわち、タイ人学習者の笑いの出現は、レベルが高くなるにつれて減少していくわけではないことが示された。しかし、上級-下から上級-中にかけて一旦減少した出現数が、再び上級-上で平均10回増えているのはなぜなのであろうか。そこで、上級-上レベル4名の個々のデータで出現した笑いの出現数を表2に示し検討する。

表2のデータ別出現数から、100名のデータの

表1 笑いの出現数とレベル

OPIレベル	平均出現数
初級-上	43
中級-下	58
中級-中	71
中級-上	48
上級-下	48
上級-中	42
上級-上	52

表2 上級-上レベルのデータ別笑い

上級-上 (n=4)	データ別出現数 (n=208)	(最大値)
038AH	141	(最大値)
087AH	7	(最小値)
097AH	36	
103AH	24	

⇒097AHと103AHの平均値30
(表中のIDはデータ番号+OPIレベル)

中で笑いが最も多かった1名(141回, 038AH)と、笑いが最も少なかった1名(7回, 087AH)が、この上級-上レベルに影響を与えていることがわかった。そこで、この2つを外れ値として除外した結果、上級-上レベル2名の笑いは平均30回であった。図1は外れ値を除外した結果である。

外れ値を除外した結果、笑いは中級-中をピークとして、レベルが高くなるにつれて減少していくことがわかった。では、なぜ中級-中レベルで笑いの出現が最も多くなっているのであろうか。それは、OPIというインタビューテストにおける4つの基準—①機能・タスク、②場面/話題、③テキストの型、④正確さ—のうちの「正確さ」が、笑いの出現に関わっているように思われる。OPIにおける「正確さ」の判定は、a. 文法、b. 語彙、c. 発音、d. 社会言語学的能力、e. 語用論的能力(ストラテジー)、f. 流暢さ⁴⁾という6

領域からその達成度が測られるが、この6領域の中の「語用論的能力(ストラテジー)」と「流暢さ」の記述に着目し当該問題を検討する。

表3は、牧野(2001:19)が提示しているOPIの「判定の基準」の「正確さ」から、「語用論的能力(ストラテジー)」と「流暢さ」の記述を抜粋したものである。

「中級」レベルの記述に着目してみると、「語用論的能力(ストラテジー)」に関しては「相づち⁵⁾、言い換えなどに成功するのはまれ」であると記されている。また、「流暢さ」に関しては「つかえることが多いし、一人で話しつづけることは難しい」と記されている。この記述から、笑いは中級レベルのタイ人日本語学習者の「語用論的能力(ストラテジー)」に対する言語的挫折として、あいつちの代わりに出現したり、言い換えに失敗して出現した可能性がある。また、「流暢さ」を維

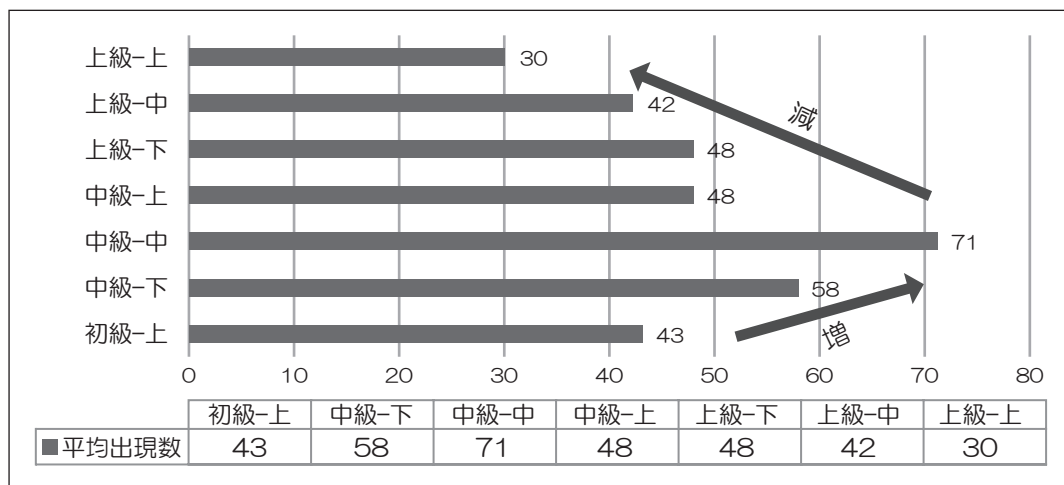


図1 笑いとOPIレベル

表3 「判定の基準」における「正確さ」(牧野 2001:19)⁶⁾

	語用論的能力(ストラテジー)	流暢さ
超級	ターンテイキング、重要な情報のハイライトの仕方、間のとり方などが巧みにできる。	会話全体が滑らか。
上級	相づち、言い換えができる。	ときどきつかえることはあるが、一人でどンドン話せる。
中級	相づち、言い換えなどに成功するのはまれ。	つかえることが多いし、一人で話しつつづけることは難しい。
初級	語用論的能力はゼロ。	流暢さはない。

持することが困難なために、つかえたところや一人で話しつつづけることができなくなったところにフィラーのように挿入された可能性もある。これらの可能性を裏付ける例として、(4)のような笑いの出現が挙げられる。中級-中レベルの(4)の学習者の発話では、**笑**の前後にフィラーが出現し、また繰り返しもみられる。

(4) テスター：毎日どんな生活をしているか、
〈毎日〉教えてもらえますか？

学習者：毎日は一えーとー **笑**、勉強と勉強 **笑**、えー日本語を勉強します、えーとー、フェイスブックをーやります **笑**、その後は一えー、友達とーパーティーを、する、はい

(中級-中、022IM)

(4)の笑いはおかしくて笑っているのではないことは明らかである。(4)の場合には、笑いが発話を維持し、間をつなぐフィラーのような役割を果

たしているといえる。

ACTFL-OPIにおいて言語的挫折と解釈される「正確さ」の下位要素にある「語用論的能力(ストラテジー)」と「流暢さ」であるが、タイ人学習者の場合には必ずしも言語的挫折を示すものばかりではない。たとえば、上級-上レベルであっても多くの笑いが出現しているからである。萩原・池谷(2017)は、笑いの直前直後のフィラーから、発話に伴う笑いの認知行動を検討し、笑いのパラ言語情報と、その前後の認知行動を可視化すると図2のようになると説明した。

こうした笑いの生起環境から、笑いがタイ人学習者にとって一種のフィラーのような働きをしていること、笑いがタイ語文化における「語用論的能力(ストラテジー)」や「流暢さ」に対するコミュニケーション・ストラテジーもしくは社会的機能として表出していると捉えることができる。笑いは通言語的な非言語行動である。しかし、水川(1993)が指摘しているように、「社会的なもの」として、異文化における笑いを捉え直す必要があると考える。

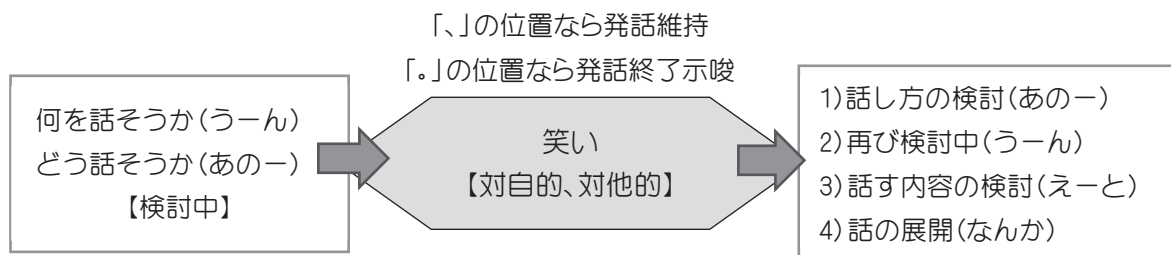


図2 発話に伴う笑いの認知行動(萩原・池谷 2017:100)

4.2 タイ人学習者の笑いはインタビューのどこに現れるのか

タイ人学習者の笑いの出現は、言語的挫折の表出なのであろうか、それともタイ語文化におけるコミュニケーション・ストラテジーの一つなのであろうか。この問題をさらに検討するために、4.2では話しているときに笑ったのか、それとも聞いているときに笑ったのかという笑いの出現域に着目して分析する。話しているときの笑いとは、(5a) のような 「笑」 で、自分のターン内に出現する、いわゆる〈話し手行動〉の笑いである。一方、(5b) のような 「笑」 は、テストターが話しているときにあいづちのように挿入される、いわゆる〈聞き手行動〉の笑いである。

(5) a. 自分のターン内での笑い

いわゆる〈話し手行動〉

テストター：外国語の教科書を、えっそれはどんな教科書なんですか？

学習者：どんな教科書、うーん、韓国語とか日本語の、教科書を、読んでいます 「笑」

(中級・中、001IM)

b. テスターのターン内での笑い

いわゆる〈聞き手行動〉

テストター：なるほど 「笑」、他にはどんな話がありますか？すごく共感したとか、ここから学んだなっていう話ありませんか？

(上級・上、103AH)

図3は、笑いが自分のターン内で〈話し手行動〉として出現したのか、それともテストターのターン内で〈聞き手行動〉として出現したのかを示したものである。黒の実線が笑いの全体数、破線が自分のターン内、グレーの実線がテストターのターン内での笑いを表している。

笑いの総数は前述したように5,255で、そのうち、自分のターン内での笑いは4,315(82.1%)、テストターのターン内での笑いは940(17.9%)であった。この結果から、タイ人学習者の笑いの8割は自分のターン内で出現する〈話し手行動〉としての笑いであることがわかった。すなわち、タイ人学習者はインタビューテストにおいて、自分がターンを維持している際に笑う傾向があるといえる。

こうした傾向に対し、図3横軸のデータ番号61、70、79、100のように、自分のターン内と、テストターのターン内の笑いの出現に偏りがないものもあった。これらはいずれも、上級-中および

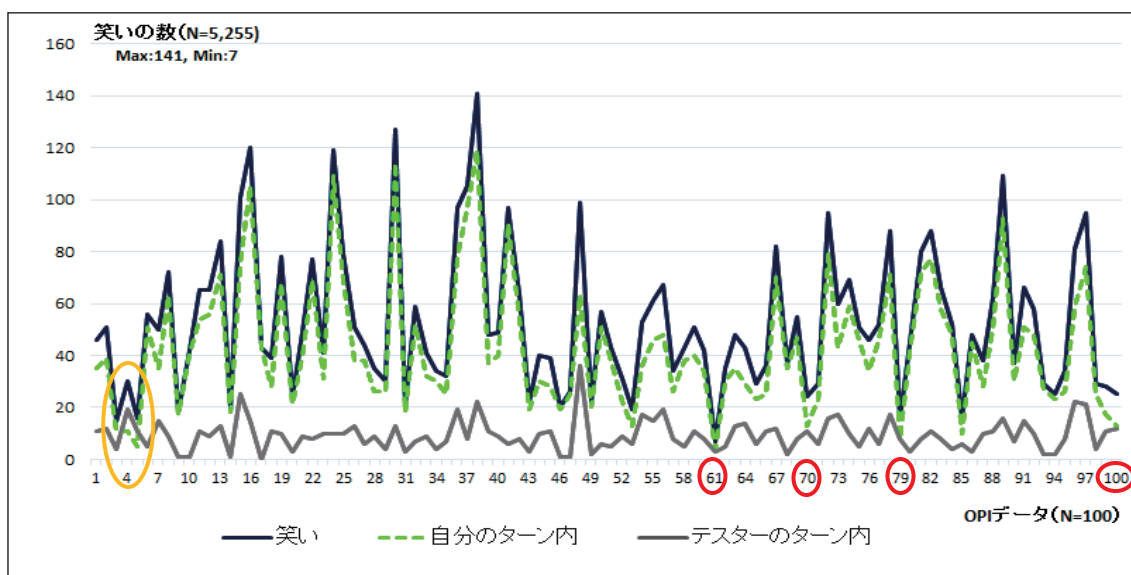


図3 笑いの出現域

上級-上の高いレベルであった。この結果から、レベルが高くなると、自分が話しているときに笑うだけでなく、聞き手行動の一つとして笑うようになり、出現域による偏りがなくなっていくことがわかった。笑いの出現が7回と最も少なかったデータ番号61（上級-上）を例にとると、自分のターンの終わりに添えられた笑いが3回、自分のターンの途中で挿入された笑いが1回で、自分のターン内での笑い〈話し手行動〉は計4回(57%)であったのに対し、テストターのターン内に挿入された笑い〈聞き手行動〉は3回(43%)で、偏りがなかった。一方、データ番号4、5のように、テストターのターン内で笑う、あいづち的笑いが、自分のターン内での笑いの2倍近くになる話者も上級-下レベルにいた。頻繁に笑うタイ人学習者であるが、村田・堀（2007）が記述しているあいづちのような笑い、すなわちテストターのターン内で笑う〈聞き手行動〉としての笑いは全体の2割弱であったことから、タイ人学習者は自分のターン内で話しているときに笑う傾向があるといえる。

4.3 タイ人学習者の笑いは発話のどこに現れるのか

インタビューテストにおける笑いの8割が、自分のターン内での出現であった。そこで4.3では、タイ人学習者が発話のどこで笑ったのかを出現位置の観点から分析する。発話における笑いの出現位置は、(6a)のように発話の始めに笑いがあるものを〈始め〉、(6b)のように発話の途中で笑いが挿入されるものを〈途中〉、(6c)のように発話の終わりに笑いがあるものを〈終わり〉と3つに分類した。

- (6) a. 始め：{笑} 困ったー {笑}
 b. 途中：えー、私はー {笑} あついでー [暑い] 天気は {笑} ちょっとー苦手なんですからー
 c. 終わり：{笑} 困ったー {笑}
 (上級-下、026AL)

表4は出現位置ごとの笑いの数と割合である。最も多かったのがbの〈途中〉に挿入される笑いで、次に多かったのがcの〈終わり〉に出現する笑いであった。

出現位置ごとに笑いの機能を考察する。(6a)のように始めに出現する笑いは「応答」と解釈できる。この位置に現れる笑いは、橋元（1994）のいう「対他機能」を持ち、ターンに関わる「会話進行調整的機能」を有している。(6b)のように途中に出現する笑いは、読点のように発話に添えられ、ターンを維持する機能がある。(6c)のように終わりに出現する笑いは句点のように発話に添えられ、先行研究では「トピック転換」を表す笑いとして「対他機能」を有すると説明されるものである。しかし、(6c)は「対他機能」というより、「対自機能」であるように思われる。それは、「困ったー」という発言が、他者に働きかける「対他的」というより、自己完結を示唆する「対自的」な発話態度のように受け取れるからである。OPIでは、テストターは(6c)のような笑いにより、トピック転換をすべきか否かを判断する可能性がある。OPI中にタイ人学習者がターン終わりに添える笑いは、「これ以上話せない」「もう限界だ」といった状況を笑いで暗に示しているようにも解釈できる。これは、森（2012）のいう笑いのパラ言語情報である。その明示的な例が(7)である。

表4 笑いの出現位置

出現位置	発話例	数 (%)
a.始め	{笑} 困ったー {笑}	305(6%)
b.途中	えー、私はー {笑} あついでー [暑い] 天気は {笑} ちょっとー苦手なんですからー	3,519(67%)
c.終わり	{笑} 困ったー {笑}	1,431(27%)

(7) テスター：終わりですか？

学習者：うーん {沈黙} {笑}

(中級-中, 001I-M)

(7) は、テスターが「終わりですか？」と尋ねたのに対し、学習者は「うーん」(検討中のフィルター)、{沈黙}、そして最後に {笑} が出現している。つまり、「これ以上話せない」「もう限界だ」という状態であることが(7)の発話に表れている。このように、発話の終わりに出現する笑いは、ターン終了の合図を伝えていると解釈できるのだが、(6c) や (7) のような例では、パラ言語行動として自己完結を伝える、すなわち「対自機能」を伝える場合もあると考える。

タイ人学習者の発話には (8) や (9) のような冒頭の笑いもあった。ターン始めに現れる笑いは 305 例 (6%) と多くなかったが、質問に対していきなり、(8) のように笑ってから答える形は不可解であり、水川 (1993) のいう「不適切な笑い」と解釈される可能性がある。なぜなら、なぜ笑ったのかが理解できないからである。(8) のような、タイ人学習者の発話に伴う日本人にとって不可解な笑いは、(3) に挙げた水川 (1993) の例を援用することで説明できる。すなわち、第一の

話し手が「ハハハハ」と笑った理由や原因を第二の話し手が見いだせない場合、第一の話し手の笑いは「不適切な活動」と解釈されるということである。これに対し、同じ冒頭の笑いであっても、(9) のように、相手が笑ってターンを譲ったため、連鎖して笑うような共鳴型の笑いの場合には、不可解・不適切な笑いとは解釈されない。インタビューテストで頻繁に繰り返し笑うタイ人学習者の笑いが適切か不適切かを分けるのは、その笑いの理由や原因が当該ディスコースの中に見いだせるかどうかであるといえる。

(8) テスター：テレビは見ますか？

学習者：{笑} テレビ、あんまり

(中級-上, 002IH)

(9) テスター：知らなかったんですか？ {笑}

学習者：{笑} 知らなかったです

(上級-中, 020AM)

4.4 タイ人学習者の笑いはどのような状況で現れるのか

最後に笑いの生起環境を分析する。インタビューテストでの笑いはタイ人学習者のどのような認知行動の現れなのであるだろうか。笑いは、動詞

表5 笑いの生起環境に出現した感動詞上位20語

出現順位	感動詞	出現度数	出現順位2	感動詞2	出現順位2
1	はい	4807	11	あの	397
2	あー	2136	12	あっ	294
3	えー	1710	13	ま	257
4	うーん	1675	14	ふーん	232
5	あのー	982	15	なんか	219
6	あ	869	16	はい	192
7	えっ	763	17	いいえ	184
8	え	731	18	と	171
9	うん	659	19	へー	167
10	う	465	20	ありがとう	161

表6 上位5語を対象とした笑いの前後の出現数

出現順位	感動詞	笑う前	笑った後
1	はい	1907	1741
2	あー	788	1013
3	えー	680	888
4	うーん	623	859
5	あのー	316	525

「する・ある・いる・思う」と副詞「ちょっと」との共起を除くと、感動詞との共起が多かった。感動詞は、話し手の認知行動に関わっていると想定される語群である。表5に共起した感動詞上位20語を示す。

笑いと最も共起していたのは「はい」で、次いで「あー」「えー」「うーん」「あのー」であった。表6は、表5に示した上位5語の笑いとの共起状況を示したものである。

表6から、「はい」は質問に対する返答の際に使用される表現であるが、笑った後に「はい」というパターンよりも、「はい」と言ってから笑うパターンの方がやや多いことがわかった。また、上位2位から5位までの表現は、いわゆるフィラーと笑いが共起するという、発話に伴う話者の認知行動が示された結果となった。この結果は、萩原・池谷(2015, 2016a)で調査した舌打ちの生起環境と類似している。

笑いの生起環境の調査により、笑いは、動詞「する・ある・いる・思う」と副詞「ちょっと」を除き、感動詞との共起が多いことがわかった。また、笑いとの共起が最も多かった「はい」に関しては、笑った後に「はい」と言うパターンより、「はい」と言ってから笑うパターンの方が多かった。タイ人学習者にとって、笑いが認知行動の現れであることは、フィラーとの共起率の高さによって明らかである。フィラーは「検討中という内部状態と結びつく感動詞」(定延 2015:9)であることから、何とか話そうとしている状況にあることが、笑いの生起環境を通して示された。特に、笑いが出現した前後20語⁷⁾の生起環境では、笑う前よりも、笑った後の方がフィラーが多くなっていたことから、笑った後に「何とか話そうとしている」状況が現れていた。たとえば(10a)では「何とか話そうとしている」話者の状況が、笑いの前後にみられるフィラー・笑いを通して、(10b)ではフィラーと共起する「言いよどみ」「繰り返し」を通して観察することができる。

(10) a. 学習者: うーん |沈黙| なんか、うーん |笑|
何かな |沈黙| うーん |沈黙| **

あっ、社会 |笑| 社会にあの、についての記事なんですけどあの、
何かなその一 |沈黙| 有名な一あの作家の記事なんですけどあの
(中級-上、013IH)

b. 学習者: うーん、うーん、このバンドはうーん5、5、5人います
うーん、歌手、うん、歌手は、うーん、アダムレヴィーンと、と言います、うー |笑| 彼はあーとっても、彼の声はとっても、うん、美しいー [美しい] です、
(中級-下、111IL)

5. まとめと今後の課題

本稿では、タイ人日本語学習者100名のOPIデータを調査し、インタビューテストでいつ・どのような状況で笑うのかを4つの観点(出現数、出現域、出現位置、生起環境)から分析した。

まず出現数について、笑いの総数は5,255で、30分のインタビューテストで1人当たり平均52回程度笑っているという結果を得た。笑いの出現数には個人差があるものの、日本語口頭能力が上がるにつれて減少していく傾向がみられた。また、中級-中レベルでの笑いが最も多かった理由としては、「語用論的能力(ストラテジー)」と「流暢さ」への挫折が笑いとなって表出したという見解を示したが、その一方でタイ語文化におけるストラテジーである可能性を指摘した。次に出現域について、笑いの8割は自分のターン内で話し手行動として現れ、2割が相手のターン内で聞き手行動として現れていることを明らかにした。先行研究で挙げられているあいづち的な笑いは、タイ人学習者の場合にはレベルが高くなると出現しないことを指摘した。出現位置については、発話の途中に挿入される笑い(67%)が最も多く、次が発話の終わりに出現する笑い(27%)で、最も少なかったのが発話の始まりに出現する笑い(6%)であった。発話の途中に出現する笑いにはターンを維持する機能があり、フィラー・言いよどみ・繰り返しの前後で出現していた。これに対

し、発話の終わりに出現する笑いには、先行研究で指摘されているターン終了の合図を伝える場合もあれば、パラ言語行動として自己完結を伝える場合もあることを指摘した。また、発話の始まりに出現する笑いについては、インタビューテストにおいて「不適切な笑い」と解釈され得ることを具体例を示し明らかにした。最後に生起環境を調査し、感動詞、特に検討中という内部状態と結びつくフィラーとの共起がみられることを示した。また、フィラーとの共起は、笑う前より笑った後の方が多く、言いよどみや繰り返しと共に出現していることも示した。

インタビューテストでの笑いは、日本語文化において不可解で不適切なものと受け取られかねない。しかし、タイ人学習者が頻繁に繰り返し笑う使用実態を踏まえると、笑いが表象する社会的なストラテジーと捉え、異文化での笑いの意味を理解しておく必要があるだろう。今後は、インタビューテストとは異なる会話データを対象として、母語使用における笑いと、日本語使用における笑いを分析し、タイ人学習者にとっての笑いの意味・機能を明らかにしたい。

注

- 1) OPI は、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages) が開発した Oral Proficiency Interview で、正式名称は“ACTFL Oral Proficiency Interview”という。これは、「外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテスト」(牧野 2001:9) であり、「15分から上限30分までの間に被験者の到達度がどこかを定めるためのテスト」(牧野 2001:12) である。
- 2) ACTFL-OPI におけるレベルは10段階で判定される。主要レベルは初級・中級・上級・超級の4レベルで、初級から上級までの各レベルはさらに3段階のサブレベル(上・中・下)まで判定される。
- 3) KH Coder とは、樋口耕一氏によって開発された計量テキスト分析のためのフリー・ソフトウェアである。利用にあたり、本研究では樋口(2014)を参照した。
- 4) 牧野(1991, 2001)は、「流暢さ」が「正確さ」の下位に分類されている点について疑問を呈しているが、本稿ではこの問題には言及しない。
- 5) 「あいづち」の表記について、引用部分を除き「あい

づち」で統一している。

- 6) ACTFL-OPI「判定の基準(概略)」の4つの能力に関する記述については牧野(2001:18-19)を参照されたい。
- 7) 萩原・池谷(2017)は、笑いの直前直後のフィラーの共起を分析し、フィラーの観点から笑いの認知行動を説明している(図2参照)。笑いの前後20語の生起環境と、笑いの直前直後の生起環境では、フィラーの共起に差異がみられる。詳しくは萩原・池谷(2017)を参照されたい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費JP16K02633の助成を受けたものである。

付記

本稿は2016年9月9日-10日に開催されたBali International Conference of Japanese Language Educationでの研究発表を基に加筆・修正したものである。

参考文献

- 笹川洋子(2008)「異文化コミュニケーションに現れる笑いのモダリティ調節について」『言語文化研究』2号、29-52.
- 定延利之(2015)「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」友定賢治[編]『感動詞の言語学』3-14、ひつじ書房.
- 萩原孝恵・池谷清美(2015)「発話にみられる非語彙要素の再検討—タイ人の舌打ちに注目して—」『第10回OPI国際シンポジウム—基調講演・パネルディスカッション・研究発表予稿論集』34-37.
- 萩原孝恵・池谷清美(2016a)「集中的に舌打ちを発したタイ人日本語学習者の発話に関する一考察」『日本語プロフィシエンシー研究』4号、5-20、凡人社.
- 萩原孝恵・池谷清美(2016b)「タイ人日本語学習者の発話に現れる『笑い』の分析—日本語OPIデータの生起環境より—」『Bali ICJLE 無限の可能性2016 予稿集』Bali ICJLE2016.
- 萩原孝恵・池谷清美(2017)「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い—タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴—」『2017年第11回OPI国際シンポジウム台湾大会—双方向教教育における教師と学生のあり方』96-103.
- 橋元良明(1994)「笑いのコミュニケーション」『月刊言語』23巻12号、42-48、大修館書店.
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 藤崎博也(2005)「音声の音調的特徴のモデル化とその応用」文部省科学研究費特定領域研究『韻律に着目した音

声言語情報処理の高度化」研究成果報告書」.

牧野成一 (1991) 「ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』1号、15-32、国際交流基金日本語国際センター.

牧野成一 (2001) 「第1章 理論編 OPIの理論と日本語教育」牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子『ACTFL-OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』8-49、アルク.

水川喜文 (1993) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロギス』17号、79-91.

村田和代・堀素子 (2007) 「異文化間コミュニケーションにおける『笑い』の機能について」『国際社会文化研究所紀要』9号、115-124.

森大毅 (2012) 「話し言葉が伝えるものとは、結局何なのか? —概念の整理および課題—」『第1回日本語学ワークショップ予稿集』387-392.

